

2024. 4. 14 (日) Iコリント15:12~19

15:12 ところで、キリストは死者の中からよみがえられたと宣べ伝えられているのに、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はないと言う人たちがいるのですか。

15:13 もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。

15:14 そして、キリストがよみがえらなかつたとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります。

15:15 私たちは神についての偽証人ということにさえなります。なぜなら、かりに死者がよみがえらないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかつたはずなのに、私たちは神がキリストをよみがえらせたと言って、神に逆らう証言をしたことになるからです。

15:16 もし死者がよみがえらないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。

15:17 そして、もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます。

15:18 そうだとしたら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったことになりません。

15:19 もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です。

<説教>

私たちの主イエス・キリストの復活を覚えて、Iコリント15章の中から使徒パウロを通して神が私たちにお語りになり、お教えになっているみことばを聞き、学んで来ました。

イエス・キリストが、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれ、三日目によみがえられた、復活なされた。その事実こそ、コリント教会の人々が、また私たちが受け入れてるべき福音、依って立つべき福音、依って救われるべき福音の最も大切なこととしてパウロが宣べ伝えていたことでした。

それなのに、それでもしかし、〈死者の復活はないと言う人たち〉がコリント教会の中にいたのということです(12)。そう言う人たちの主張は、「死んだキリストの復活などそもそもあり得ない」ということだったのか、または「キリストが復活したことは信じる。でもそれは神であるキリストだけの特別なことであって、我々人間のキリスト者が死んでも復活することはない」ということだったのか(分かりません)。

しかし、もちろんパウロはそのどちらの主張をも否定します(13)。〈キリストは死者の中からよみがえられたと宣べ伝えられている〉(12)とおりに、キリストの復活はもちろん間違いありません。それゆえ「死者の復活はない、ということはありません」、「死者の復活もある」と言うのです。死者の復活とキリストの復活、このどちらかがあってどちらかがない、ということはありません。あえて言うなら、「どちらもない」か「どちらもある」の二つに一つです。もちろん、「どちらもある」です。キリストの復活が厳然たる事実である以上、死者の復活も必ずあるのです。要するに、キリストの復活と死者の復活は絶対に切り離すことができない、ワンセットのことなのです。もちろん、キリストの復活が先で、死者の復活が後です。「死者の復活」の基礎、原因は「キリストの復活」にあります。〈キリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました〉(20)。も

し死者の復活がないとしたら、キリストは復活する必要もなかったと言えるでしょう。キリストが復活したのはキリストにあって死ぬ死者をご自分と同じように復活させるためでした。だからキリストの「死と復活」も一つ、ワンセットで大事なのです。

それで、キリストの復活がなければ福音宣教も福音信仰もすべてが〈空しく〉、意味なく、中身なく、台無し、ぶち壊しになってしまいます(14)。キリストの復活がなければそもそも福音は嘘、偽物ということになってしまいます。そんな嘘、偽物の福音を信じる信仰も偽物、偽物による救いもまた偽の救いになってしまいます。そんな福音宣教や信仰なら無益、無駄です。しない方がましです。

そんな「キリストの復活なき福音宣教」は空しいだけです。いやそれだけではありません。そんな福音宣教者はむしろ皮肉なことに〈神についての偽証人という〉意味、実態を持つことになります(15)。なおパウロはここでも〈かりに死者がよみがえらないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはず〉だと、キリストの復活と死者の復活の一体性を言っています。そしてここでパウロがいのちを賭けて言っていることは、本当に〈神がキリストをよみがえらせた〉のか、さもなくば自分たちが〈神に逆らう証言をした〉〈神についての偽証人〉なのかという、これまた二つに一つのことです。私たちはまた来主日からパウロの福音宣教の様を使徒の働きから見て行きます。既に学んで来たようにペテロを始めとした使徒たちそしてパウロたちは〈この地上のいのち〉の危険をおかして主のために働いたのですが、それらが〈神についての偽証人〉としての、また嘘と偽物の福音宣教者としての奮闘だったとは考えられないことです。もしそうならしない方がましです。

〈もし死者がよみがえらないとしたら、キリストもよみがえらなかったでしょう。〉(16)と改めて念押しして、パウロは自分が宣べ伝えた本当の福音を信じた(はずの)コリント教会の人々に言います。もしキリストが復活しなければ〈あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今なお自分の罪の中にいます〉(17)と。キリストの復活がないとしたら、キリスト信仰、福音信仰それ自体に意味がありません。そしてやはりいわば逆の意味を持つことになります。それは「今なお罪の中にいる」という意味、実態です。つまり、キリストが復活しなければキリストを信じる者たちには罪の赦しも、キリストの義も与えられないのです。キリストが復活した、即ち神がキリストをよみがえらせたということは、イエス・キリストの十字架の死を、すなわち私たちの罪のための、私たちの罪をその身に負っての身代わりの刑罰の死を、そのキリストのみわざを、〈十字架の死にまで従われ〉(ピリピ 2:8)た完全な従順として神が喜んで受け入れ、お認めになったということです。キリストを完全な義人として、キリストの義を喜んで認め、受け入れられたということです。〈主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました〉(ローマ 4:25)とパウロは言います。神は福音を信じ、死と復活のキリストを信じ、私たちの罪のために死なれたキリストを復活させた神を信じる私たちにキリストの義を与えて私たちが義と認めるために、キリストを復活させられたのです。

復活がなければキリストの十字架の死もまた〈空しい〉のです。キリストは私たちのために、私たちの身代わりに死なれた。しかし神に喜ばれず、受け入れられず、義人と認められなかったとしたら…。そんなキリストとその福音を信じて、私たちの罪が本当に、現実に赦され取り除かれることはなく、またキリストの義が私たちに本当に、現実に与えられることはありません。つまり、そんな信仰は〈空しく〉、私たちは〈今なお自分の

罪の中にいゝることになります(17)。

ならば〈キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまったことになります〉(18)。つまりキリストを信じて死んだ人々は、神に喜ばれず、むしろ怒りの下にあり、罪を取り除かれたおらず、赦されておらず、キリストの義を頂くことなく、悪魔の子、地獄の子として永遠の滅びにあるということになるのです。

それで、復活のキリストを信じない信仰(?)生活は、結局は〈この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いて〉の生活です。それで何らかの、それなりの、時々心の平安を持って生きることぐらいはできるかもしれませんが。でも、それは、やがて必ず死んで去らなければならない〈この地上のいのち〉限定のことです。結局死を恐れ、神の怒り、永遠の滅びを恐れる故に、死なないように死なないように生きるほかありません。死に打ち勝つ〈望み〉に生きることにはできません。私たちがそんな信仰者なら〈すべての人の中で一番哀れな者です〉。しかし確かにキリストは復活なさいました。その復活のキリストを信じる者の望みは、一度死んでも、やがて必ずキリストと同じように肉体をもつて復活させられ、キリストとともに永遠に生きることにあります。

〈この地上においてのみ〉ならず、一度〈この地上において〉のいのちを終えた後の、キリストの復活に基づく罪の赦しとキリストの義を頂き、復活のからだを頂いて永遠に生きる望みを抱いているなら、私たちはすべての人の中で一番幸いな者なのです。